

まえがき

本書は、2016年度と2017年度の2年間にわたってアジア経済研究所で実施された研究会「中東イスラーム諸国における生殖医療と家族」の最終報告書である。

1978年に世界初の体外受精児がイギリスで誕生して40年。生殖補助技術を用いる不妊治療は、世界の多くの地域で、子どもを望む人々に光明を与える画期的な医療として普及をみてきた。中東もその例外ではない。

不妊治療に用いられる生殖補助技術は標準化されており、また人間の身体にかかわることがらである以上、人々が患者として味わう経験は似かよったものになるのではないか。一方、人々が生殖補助技術という新たな選択肢にどう向き合うのか、さらには治療の経験や治療によって子を授かることに、どのような意味を与えるのかといったことがらは、社会的文化的な文脈と切り離しては考えられないだろう。生殖補助技術によって不妊が治療可能になった時代に、中東の人々は家族をどのようにつくり、生きようとしているのか。こうした関心を出発点として企画されたのが、上記の研究会である。

日本人ジャーナリスト殺害を含む各地でのテロ事件や難民問題などの報道に接するなかで、日本では昨今、暴力に満ちた中東というイメージが以前にもまして強まっているように感じられる。不妊治療と家族という、私たちにとっても身近で切実なテーマを「窓」とすることにより、暴力や抑圧で彩られた中東のイメージとはちがう景色がみえてくるのではないか。それにより、中東という場や、そこに生きる人々への理解を深めることにつながられるのではないか。研究会に集ったメンバーはそうした願いも共有してきた。

研究会の運営と本書の出版にあたっては多くの方々のご助力を得た。研究会では、宇田川妙子、根村直美、松尾瑞穂、武藤香織の各氏に講師をお願いし、それぞれのご専門の立場からご教示いただいた。岡奈津子、高橋

理枝のお二人には、オブザーバーとしてご参加いただいた。本書の出版に際しては、岩崎えり奈、宇田川妙子、松尾瑞穂の各氏にコラムをご執筆いただいた。勝康裕氏には、研究所の編集・出版アドバイザーとしてご助言いただいた。モハンマドホセイン・ニコプール氏にはカバーへの作品の使用をご快諾いただき、熊谷聡氏には地図の作成にご協力いただいた。匿名の二名のレフェリーから詳細なコメントを受け、また編集担当者のご尽力を得た。この場を借りて、関係者の方々に心よりお礼を申し上げたい。

2018年2月4日

编者